

# 六甲全山縦走大会に参加した さて結末は？

日程：2015年 10月8日

メンバー：矢澤昭文、Kさん

報告：矢澤昭文



スタート時の横断幕

11月8日に神戸市の六甲全山縦走大会にKさんと共に参加した。この全山縦走の距離は56km、久しぶりのロングトレイルで、この日のこともあり、鹿島槍や権現づるね等、長い山道を歩いていた。さてその成果はあったのだろうか？

六甲山は神戸市に住む外国人たちが、明治期に山歩きを始めて開拓されていった山域である。その外国人たちの登山活動に大きく影響を与えたのが、日本アルプスの世界でも有名なウェルター・ウェストンだった。六甲山中に英語の地名が出てくるのはそういう歴史があつてのこと。その後は日本人にも登山熱が広まっていき、大正13年にはクライミングを目指す登山クラブ「RCC」が藤木九三等により結成された。さらに、六甲山は一番高い所でも1,000mに満たないために、自宅から毎日でも登ることのできる山として神戸市民の山として発展した。そしてその仕上げとして全山縦走が位置している。ということが大会案内に添付されていた冊子に書かれていた。

朝6時、ほとんど初めての関西の電車に乗り、阪神だか阪急電車の須磨浦公園駅に着き受付をした。天気は小雨、雨具を着て、またその時刻は暗くヘッドランプを点けてのスタートとなった。その直後、長い階段が待っていた。小雨でも気温は高め、雨具の中が汗で蒸れてきたため雨具を脱いだ。最初のピーク、246mの八伏山、そこから神戸港が見えた。周囲は既に明るくなっていた。晴れていればもっと良かったのと思った。

次のピークの後は住宅街へ下った。団地内ということで「静かに」というプラカードを掲げていたスタッフが目についた。団地を過ぎると道路の上を横切る鉄橋を渡り、その先は階段だったが、鉄橋辺りからかなりの渋滞。これが最初の渋滞だった。

のろのろと進み、しばらくすると須磨アルプス手前まで来た。渋滞は続いていた。雨は止んでいたが、この長い停滞で身体はすっかり冷えてしまっていた。須磨アルプスは距離は短いが岩尾根が続く山稜だった。

それにしてもこれ程渋滞するとは・・・

再び市街地へ道は続いていた。住宅街や小学校や保育園等の建つ道路を進んだ。そしてまた山道が始まるという繰り返しだった。そして山道になると必ず渋滞が発生していた。その集団の先頭の者は明らかにペースが遅いのだが、道を譲る気配が全くないのだ。自分は途中から『神戸の六甲全山は譲らん大会だ。』と呟きながら登っていた。

市街地のアスファルト道と山道の渋滞、そして天気はずっと良くなって、自分のモチベーションはどんどん下がっていった。56 km、走らなくても 12 時間以内でのゴールを考えていたが、難しい状況になっていた。冊子には、渋滞は予想されるので嫌な者は大会でない日に縦走をと書かれていたが、これ程ひどいとは、そして譲らん態度が嫌だった。

それでも六甲山上までやって来た。既に 30 km 以上は歩いていた。ここまで来るとさすがに疲れを感じた。標高は 900m を越えていて周囲はガスに囲まれていた。ヘッドライトを点けた自動車が走る横の歩道を歩いていると、「郵便局の前で温かいものを飲んでいってください。」という声が聞こえた。しばらく進むとテントが目に入り、そこで甘酒が振舞われていた。六甲郵便局の職員たちが、自分たちは休日にもかかわらず、こうして全縦大会の参加者たちを応援していたのだ。ずっと続けていたんだなと感動していた。実は自分は 15 年程前に 2 度この大会に参加していたのだ。コース等はすっかりと忘れていたが、その時のこの郵便局での暖かいおもてなしは心に残っていた。

せっかくのおもてなしだったが、自分たちはこの先の六甲ガーデンテラスでスタッフにリタイアを申し出た。歩き始めて 10 時間経過していて疲れはあったが、ここからはほとんど下りである。決してゴールできない状態ではなかったが、心が楽しめなくなっていた。

トイレで着替えを済ませ、バスとケーブルを乗り継ぎ電車に乗り三ノ宮まで来た。三ノ宮駅近くの海鮮物専門の居酒屋で、35 km、10 時間歩き続けたことにささやかな乾杯をした。

六甲全山といっても市街地のアスファルト道が多く、独立した山域を無理やり繋げたような印象を受けた。ただ六甲山自体は標高が低い割には懐が深く、じっくりと登れば味わいのある山だと思う。